イスラームの人間観・世界観

―宗教思想の深淵へ

塩尻 和子 著

筑波大学出版会

はじめに

イスラーム思想はその発祥当初から周辺地域の諸宗教や諸思想を柔軟に取り入れて、イスラームの教義に適合するように合理的な解釈を加えながら、自己のものとしてきた。それは同じ神からの啓示を共有するユダヤ教・キリスト教という「啓典の宗教」だけでなく、表向きには多神教・偶像崇拝として排斥してきたゾロアスター教、マニ教、ヒンドゥー教、仏教などにも寛容な対応をすると同時に、イスラーム思想の発展に役立つ情報を貪欲に吸収してきた。とくになかば廃れていたギリシア思想や科学を取り込み、おおいに利用したことは、特筆される事実である。そこにはイスラームという宗教が本来的に包含している理性主義と実践的共存の理念がみられる。

このような活発な思想的営為の歴史から、今日の私たちが学ぶべきことは、イスラームが本来もっている宗教的寛容と学問的情熱の奥行きの深さであろう。イスラーム思想の深淵に迫る研究は、宗教的理想と歴史的現実とを混同することなく、客観的な立場から今日のイスラームを理解するための手引きともなると思われる。

日本でもイスラームに関連する書籍がかなり多く出版されてきているが、そのほとんどはイスラームの内側から一元的に宗教思想を解説するだけのものと、西洋キリスト教世界を敵視しながら最後の一神教としてのイスラームの優越性を説く護教的なもの、あるいは、それに反して、イスラーム・バッシングを目的としてイスラームの危険性を強調する偏見と蔑視に満ちたものなどに分けられる。

私が意図するものは、このいずれにも属さない、ひろく比較宗教学的な見地からイスラームを捉え、客観的な視点からイスラームを再考するものであり、とくにイスラーム神学思想カラームの展開を中心としてイスラームの思想的営為の深淵を学ぶものとなるような著作である。

私はこれまでイスラーム思想史のなかでも、とくに最初期の大思想運動を展開したムウタズィラ学派の理性主義的な神学思想を、のちの多数派スンナ派思想のもととなったアシュアリー学派の見解と対比しながら研究してきた。イスラームの理性主義的な立場は、一一世紀以降、ムウタズィラ学派が周縁地域に追いやられたのちも消滅することなく、伝統的な宗教思想の内側においても機能的に展開してきた。そういう意味では、ムウタズィラ学派の思想を丁寧に検討することは、イスラーム神学思想の深淵にせまるために極めて有意義な手法であると思われる。

本書の内容は、おもに著者がすでに発表した論文のなかから聖典研究や古典文献研究などに基づいたイスラーム神学研究を中心にして『イスラームの人間観・世界観――宗教思想の深淵へ――』のテーマのもとにまとめたものである。この著作で特筆されることは、聖典クルアーンの文献学的研究と、一〇世紀から一二世紀にかけての古典期神学思想の文献を研究した神学研究の論文などを基盤として「イスラームの人間観と世界観」を明らかにし、それによって現代のイスラームを理解しようとする研究手法である。宗教においては、通時的研究ももちろん重要であるが、宗教的教義や信条を共時的に把握し理解する作業もまた重要であり、この作業が欠けているなら、その宗教の本質を真に理解することは不可能であろう。そういう意味ではイスラーム神学思想カラームの研究と、現代世界の平和構築にむけて急務とされるイスラーム理解へむける研究は、密接に重なり合っている。むしろ、イスラームという世界宗教のもつ理念的思惟的な側面を明らかにし、現今の世界に蔓延するイスラーム蔑視に傾くことなく、たがいに人間としての共通点をみつめなおして、平和と共存の道を探る試みとなると思われる。

本書はおもに神学思想を扱った前半（第一章から第三章）と、神学思想から解きほぐしながら他宗教観を経て、平和的共存へ向かう議論を扱った後半（第四章から第五章）に分かれる。

「第一章、イスラームの人間観と自然観」では「一、人間観」で人間の被造物性から、死を超えて来世へつながる死生観を検討する。「二、葬送」ではこのような死生観をもとに現実に実施される葬儀を概観しながら、簡素な葬送儀礼から学ぶことはなにかを考える。「三、環境倫理」では人間の被造物性から導き出される環境保護の観念を考え、宗教と環境倫理の相互関係を明らかにする。「四、イスラーム的フェミニズムの地平」では、男性優位の

宗教であるとみられがちなイスラームの女性観を、聖典クルアーン、イスラーム家族法、現実の対応、の三側面から検討し、本来の教義では男女平等を謳った思想であることを論じる。

「第二章、啓示と理性」では、「一、初期イスラーム神学とムウタズィラ学派」で初期イスラーム神学の成立過程におけるムウタズィラ学派の思想を概観する。「二、クルアーンの倫理」では聖典クルアーンの説く倫理的基準を明らかにし、イスラーム法の理念を考える。「三、宗教倫理思想の枠組み」では理性主義的な倫理思想とアシュアリー学派の思想、さらに哲学者の倫理思想とイスラーム神秘主義思想にみられる独自の倫理思想を検討して、イスラーム倫理思想の枠組みを明らかにする。「四、アシュアリーと獲得説」ではアシュアリー神学の「獲得説」を取り上げ、伝統主義的神学の立場から倫理思想を検討する。「五、クルアーンと「神の言葉」(Kalām Allāh)」では聖典クルアーンの「言葉」について、理性主義的な立場からのロゴス論と聖典論の展開を検討する。

「第三章、イスラームの世界観」では、「一、クルアーンにみる世界の創造」において、クルアーンの天地創造物語を、クルアーンの章句を詳細に検討しながら再構成を試み、神による「無からの創造」について明らかにする。「二、新プラトン主義とイスラーム神学」では、イスラームの古典期の思想形成に大きな影響を与えたギリシア思想のなかでも、とくに新プラトン主義思想との関連を取り上げる。次に「三、来世の復活と新しい創造」では、「第一章」でみてきた死生観に関連する思想をイスラームの原子論における展開のなかで明らかにする。「四、原子論的宇宙論」では、原子論的存在論の完成者として名高いアシュアリーの思想を前後の時代の学者の見解と対比しつつ検討し、原子論が神の天地創造を理論づける役割を担っていたことを明らかにする。

「第四章、ひとつの神と三つの宗教」では、「一、ムウタズィラ学派の属性論にみる「神の唯一性」」において理性主義的神学ムウタズィラ学派の思想から神の唯一性に関する議論を検討する。「二、イスラーム神学とキリスト教」は中世期のイスラーム神学においてキリストの三位一体論がどのように議論され検討されてきたのか、概観する。この概観から「三、イスラーム神学と「三位一体論」」では、ムウタズィラ学派後期の学者アブドゥル・ジャッバールの思想から「三位一体論」についての議論を検討する。「四、共存と対話の思想史」では、古代から中世

にかけて、政治的に困難な時期にありながらイスラーム教徒とユダヤ教徒が比較的平穏な共存の中で、大きな思想的発展を遂げてきた歴史的経緯を明らかにする。

「第五章、イスラームの他宗教観」では、さまざまな観点からイスラームを巡る宗教間対話の可能性を探る試みを展開する。まず「一、宗教多元主義とイスラーム」では、ジョン・ヒックの宗教多元主義をもとにして、イスラームとキリスト教の共存と対話は可能なのか、考える。「二、中世イスラームのインド仏教観」では、乏しい資料ながらも、現代まで残された神学思想の資料から、イスラーム教徒がみたインド仏教に関する記述や比較議論を紹介する。「三、平和を作り出すために」は、私たちの子孫へむけての著者の提言である。魂の救済装置であるべき宗教が古来、戦争や紛争、殺戮に関わってきた原因を考えると同時に、ユダヤ教・キリスト教・イスラームという高邁な宗教的理想もつ三つの宗教が協働することによって平和を作り出すことができるのではないかと訴えるものである。

もとより本書の内容は拙いものであるが、この小著がイスラーム理解の推進と宗教間の平和的な共存の実現に、いささかでも役に立つのであれば、イスラーム研究者として、これ以上のしあわせはない。

二〇〇八年二月吉日

春を待つ筑波山のふもとにて

塩尻和子

初出一覧

第一章、イスラームの人間観と自然観

一、人間観

「イスラームの人間観――クルアーンを読み直す(1)」『中東協力センターニュース』中東協力センター、二〇〇二年七月、一二六―一三〇頁)

二、葬送

書き下ろし

三、環境倫理

「クルアーンの自然観と人間観」（溝口次夫・リチャード・ワイスバード編著『環境と宗教』環境新聞社、二〇〇六年、一六五―一九七頁）

四、イスラーム的フェミニズムの地平

「現代イスラームと女性」（『現代宗教二〇〇二』東京堂出版、二〇〇二年、五四―六九頁）「イスラーム世界の女性」（『世界』六七九号、岩波書店、二〇〇〇年、一〇〇―一〇五頁）

第二章、啓示と理性

一、初期イスラーム神学とムウタズィラ学派

『イスラームの倫理―アブドゥル・ジャッバール研究』（塩尻和子著、未來社、二〇〇一年、一七―二五頁）

"Reason and Revealed Law in Mu'tazilite Ethics"（『哲学・思想論叢』第一八号、筑波大学哲学・思想学会、二〇〇〇年、一―一一頁）

二、クルアーンの倫理

「イスラームの倫理」（竹下政孝編『イスラームの思考回路』、『講座イスラーム世界』第四巻）、栄光教育文化研究所、一九九五年、一〇六―一一二頁）

三、宗教倫理思想の枠組み

「イスラームの倫理」（竹下政孝編『イスラームの思考回路』、『講座イスラーム世界』第四巻、栄光教育文化研究所、一九九五年、一一二―一四三頁）

四、アシュアリーと獲得説

「アシュアリー神学の位置づけ」（『宗教と倫理』第二号、宗教倫理学会、二〇〇二年、二三―三六頁）

五、クルアーンと「神の言葉」（Kalām Allāh）

「クルアーン創造説における「神の言葉」（Kalām Allāh）」（『イスラム世界』第四八号、日本イスラム協会、一九九七年、一九―三八頁）

第三章、イスラームの世界観

一、クルアーンにみる世界の創造

「コーランにみる「世界の創造」」（月本昭男編『創成神話の研究』（LITHON、一九九六年、一七七―二〇四頁）

二、新プラトン主義とイスラーム神学――プロティノスとアブー・フザイルの「一者論」

「プロティノスとアブー・フザイルの「一者論」――新プラトン主義とイスラーム神学」（『哲学・思想論集』第二七号、筑波大学哲学・思想学系、二〇〇二年、七五―九六頁）

三、来世の復活と新しい創造

『イスラームの倫理―アブドゥル・ジャッバール研究』（二四〇―二四九頁）

四、原子論的宇宙論―アシュアリーからジュワイニーまで

「イスラーム神学にみる原子論的宇宙論—アシュアリーからジュワイニーまで—」（『宗教哲学研究』No.22、京都宗教哲学会、二〇〇五年、一七—三二頁）

第四章、ひとつの神と三つの宗教

一、ムウタズィラ学派の属性論にみる「神の唯一性」

「ムウタズィラ派の属性論にみる『神の唯一性』」（『精神科学』第三四号、日本大学哲学会、一九九五年、二三—三六頁）

「ムウタズィラ派研究の問題点とその展望」（研究ノート、『オリエント』第三四巻一号、日本オリエント学会、一九九一年、七九—九三頁）

二、イスラーム神学とキリスト教

書き下ろし

三、イスラーム神学と「三位一体論」

「アブドゥル・ジャッバールのキリスト教理解——イスラーム神学における宗教間対話」（『宗教研究』三四一号、日本宗教学会、二〇〇四年、三四九—三七三頁）

四、共存と対話の思想史

「中世イスラーム世界のユダヤ教——共存と対話の思想史」（『比較文明』第一七号、日本比較文明学会、二〇〇一年、五五—六六頁）

第五章、イスラームの他宗教観

一、宗教多元主義とイスラーム

「宗教多元主義とイスラーム」（『宗教研究』第三二九号、日本宗教学会、二〇〇一年、二四七—二七二頁）

二、中世イスラームのインド仏教観

"Medieval Islamic References to Indian Buddhism"（『哲学・思想論集』筑波大学哲学・思想専攻、第三二号、二〇〇七年、二九—三二頁）

三、平和を作り出すために

書き下ろし

凡例

一、クルアーンの日本語訳は日亜対訳『聖クルアーン』（宗教法人日本ムスリム協会、昭和五七年）を用いたが、筆者が独自に訳出した部分もあることをお断りしておきたい。関連するクルアーンの章句番号については、おもな箇所を例示するにとどめた。章句番号はたとえば（六七三）のようにしるし、「六章七三節」を示す。

二、聖書は『聖書』（新改訳、日本聖書刊行会、昭和四八年）と『聖書』（新共同訳、日本聖書協会、一九九九年）の両方を用いた。

三、論文の中には、その論文で用いた凡例を文末に記したものがある。原典資料の当該箇所を把握するために便利なように、そのまま残した。

四、註は各項の論文の最後に入れた。註をつけなかった項もある。